麻　生　区

麻生区のなりたち

麻生区は、市の北西の端に位置し、多摩丘陵の谷戸と丘の上に市街地が広がっています。東は多摩区・宮前区に、西は東京都多摩市・町田市に、南は横浜市青葉区に、北は東京都稲城市に接しています。南西部に飛び地の岡上があります。

麻生区の地域は、古代から武蔵国都筑郡（むさしのくにつづきぐん）に属しており、一部が橘樹郡（たちばなぐん）に含まれていました。

鎌倉末期には麻生郷という名が見られ、室町時代には黒川郷・片平郷・小沢郷などの郷名も見え始めます。
江戸時代には、武蔵国都筑郡に黒川・栗木・片平・五力田・古沢・万福寺・上麻生・下麻生・王禅寺・早野・岡上、橘樹郡に高石・細山・金程の村が存在しました。

明治 22 年の市制町村制施行により、武蔵国都筑郡の 10 村が、合併して柿生村となり、橘樹郡の 3 村は、生田村に編入されました。

昭和 13 年に生田村が、翌年に柿生村及び岡上村が川崎市に編入され、これにより、旧村は川崎市の大字(おおあざ)となりました。昭和 47 年の区制の施行により多摩区となり、昭和 57 年に多摩区から分区して麻生区が誕生しました。

麻生という名は、直接的には昔の郷名からとったものです。麻生は「麻の生（お）うる地」という地名で、麻(＝多分からむしというイラクサ科の植物)の自生が目立つ所だったのでしょう。また「麻織物の生産の多い所」というような解釈もできるかもしれません。
奈良時代の律令制のもとで、庸(よう)や調(ちょう)の貢物として麻布が用いられ、地方にとっては大事な生産物だったのですが、その「麻布の沢山とれる地」というのが地名だとすれば、「麻生」もかなり古くからのものだろうと推察されます。

現在、新百合ヶ丘駅周辺に官公署・大型商業施設が立ち並ぶようになり、川崎市北部地域の新たな商業・文化の中心地として大きく発展しています。

高いところの石とは？

高　石[TAKAISI]

❍場所

麻生区の北東の地域で、現在の高石 1～6 丁目にあたります。東は多摩区の生田、北は細山、西は万福寺、南は百合ヶ丘に隣接します。

江戸時代には、高石村という一つの村でしたが、明治 22 年に生田村に編入され、その大字（おおあざ）名となりました。

❍由来

地名の由来は定かではありません。

地形からきた地名とする見方がよいでしょう。この地域の丘陵の連なりの中でも、特に目につく高い峰である「お伊勢の森」や「権現森」(ごんげんもり)を、人々は「高し」と言って仰ぎ見ました。

この「タカシ」が後の時代に音韻の変化により、「タカイシ」と呼ばれるようになったのではないかと考えられます。

エピソード

「新編武蔵風土記稿」（しんぺんむさしふどきこう）と言う江戸幕府が作った地誌（ちし）によれば、戦国時代末に武田氏が滅（ほろ）んだ時、その家臣だった加々美正光（かがみまさみつ）が、高石へ逃（のが）れてきて住みついたといいます。江戸時代には、加々美氏は徳川家の旗本となり、この高石村の知行主（ちぎょうぬし＝支配者）となりました。ですから高石村と加々美氏とはつながりが深いのです。高石にカガミの名字（みょうじ）が多いのはその関係です。

高石神社

ただそのカガミは「各務」と書きます。もとの加々美から分かれた家ということでしょうか。

その他、村の草分けとしては、吉沢・笠原・石塚・木下があり、「高石五苗」(たかいしごびょう)とよばれます。

百　合　丘〔YURIGAOKA〕

❍場所

小田急小田原線百合ヶ丘駅の南にあたる地域です。昔の高石村の字（あざ）名では、富士塚・中半郡（なかはんごおり）・半郡・二本松で、現在の百合丘 1～3 丁目にあたります。

❍由来

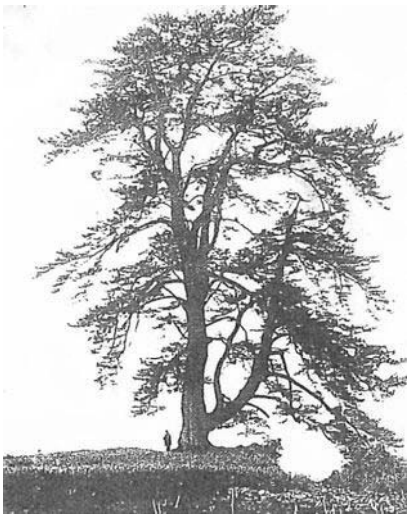
この地域は多摩丘陵にあたり、谷戸が多くあり、雑木林や草原が続き、小さな谷間に水が流れる自然の多い所でした。山百合も沢山生えていました。

昭和 30 年代前半に住宅公団が、ここに大型住宅団地を造成し、団地の名前としてつけたのが「百合ヶ丘団地」でした。

神奈川県下では最初の大団地だったため、県の花「山百合」にちなんで命名したということです。小田急の駅名もこれにならい、町名も区画整理の後、百合丘 1～3 丁目となりました。

エピソード

百合丘駅前から団地方向に向かって坂道を歩いて行くと、「弘法の松」のバス停につきます。このバス停の南側に弘法の松公園があります。



かつての弘法の松

ここには、かつて古い松の大木がありました。高さ 30m・太さ（幹まわり）8mの大きさで、橘樹郡（たちばなぐん）と都筑郡（つづきぐん）の境の目印になっていました。

母親の眼病に苦労する若者が、ここで弘法大師のお告げを受け、そのお蔭げで、母の病気を治すことができたことから「弘法の松」の呼び名がついたと言われます。

しかし、残念なことに、昭和 31 年に失火で焼け落ちてしまい今はありません。2 代目の黒松が植えられています。

丘の稜線が細長い

細　山[HOSOYAMA]

❍場所

麻生区の北部の地域です。北は東京都稲城市で、東は菅・生田、南は高石で、西から南にかけては金程・万福寺です。

江戸時代には、細山村という村でした。現在は、細山 1～8 丁目、千代ヶ丘 1～9 丁目、向原 1～3 丁目、多摩美 1～2 丁目となっています。

❍由来

地名の由来は、丘陵の連なりが東西に細長く伸びていることによると思われます。

江戸時代の地誌によれば、中世までは山林が多く、田畑の少ない村だったようです。江戸時代に入って、土地の人たちが荒れ地を開墾して村を広げていったということです。

エピソード

細山 4 丁目のあたりは本村とよばれ、村の中心地でした。江戸時代には、郷蔵（ごうくら＝年貢米を貯えておく蔵）や高札場が置かれていたそうです。

香林寺の五重塔

細山 3 丁目の香林寺は臨済宗の古寺ですが、昭和 62 年に見事な五重塔を建設しました。塔としては珍しく唐様(からよう)で、れんじ窓を持ち、最上層の垂木(たるき)が扇型に広がっています。太子堂には、高村光雲作の聖徳太子像が安置されています。

山門の脇には、細山郷土資料館もあります。いろいろな農具や民具が並べられ、土地の人々の生活を通しての歴史を知ることができます。

金　程[KANAHODO]

❍ 場所

麻生区の西寄りの地域で、東は万福寺、西は東京都稲城市です。江戸時代には、金程村という一つの村でした。

明治 22 年の市制町村制により、生田村に編入されてその大字となりました。現在、金程 1～4 丁目となっています。

❍ 由来

「カナ」とは金(＝カネ)、つまり金属を意味します。「金っ気」（かなっけ）の多い水が流れる所とか、鉄分の多い砂鉄の取れる所の地名によくつけられます。

ホトは、地名では「奥深い隠し所」という意味で使われます。

また「ホト」は「ホド」と読み、「火床(ほど)」を意味する言葉ともとれます。火床とは、鍛冶屋の製鉄・鍛錬の火のことで、中世には鍛冶屋集団の単位として使われました。

「カナ」と「ホド」に分解した言葉を、今度はそれぞれ合成してみると、

一つは、鉄分の多い水が流れる奥深い谷間の地。

もう一つは、鍛冶屋集団の金属精錬が行われた所。

由来はそのどちらかであろうと思われます。

エピソード

金程の地名が歴史にあらわれるのは、15 世紀の室町時代中期の記録からです。それによると、「小沢郷」という郷に含まれ、細山・菅と同じ郷中であったようです。また、この地域が、現地の有力者から京都の南禅寺に寄進（きしん＝土地の権利を名義上だけ寄付すること）されたとのことです。このことから、歴史の古い地域だということがわかります。

中学校名にも残る金程の地名

金程 1 丁目の東部から万福寺の境にかけて、室町時代の「小沢原(おざわっぱら)の合戦」の跡といわれる所があります。上杉氏の勢力と、小田原北条氏との決戦で、北条氏側が勝利したので「勝坂」（かちざか）と呼ばれるそうです。

白　鳥【SIRATORI】

❍ 場所

麻生区の西に位置し、小田急多摩線の五月台駅と栗平駅の中間で、線路をはさんでその南北に広がっています。

昔は片平村の字吾妻（あざあづま）という所で、それに五力田(ごりきだ)村の字小台（あざこだい）の一部が合わさった地域です。

白鳥 1～4 丁目にあたります。

❍ 由来

片平村の鎮守である白鳥神社が、現在の白鳥 2 丁目にあり、この神社から白鳥の町名が生まれました。

白鳥神社は、ヤマトタケルノミコトが、祭神（＝神社にまつられている神様）となっています。「古事記」(こじき)によると、ヤマトタケルノミコトは、東国遠征を終わって故郷へ帰る際、名古屋の付近で病気になり、伊勢のノボノという所で亡くなります。その時、魂が白い大鳥（おおとり）となってふるさとの大和へ向かって飛び去ったということです。

この伝えから、白鳥は、ヤマトタケルノミコトのシンボルとされ、ミコトを祀(まつ)った神社に白鳥の名がつけらたのです。

エピソード

字吾妻は、明治の始めにつけられ、白鳥神社があるところという字名です。ヤマトタケルノミコトが東国から帰る時に発した「あづま　はや(＝ああ　わがつまよ)」という言葉にちなんで、ヤマトタケルノミコトに関係するところに、「吾妻」の名がよく使われます。

白鳥神社

黒　川【KUROKAWA】

❍ 場所

麻生区の最も北西の地域です。隣接する地域は、南東は栗木・栗木台で、それ以外はすべて東京都となり、東は稲城市、北は多摩市、西は東京都町田市です。

柿生地区の他地域は鶴見川流域ですが、黒川は、三沢川を通って多摩川流域となります。昔は黒川村という一つの村で、現在は黒川・南黒川・はるひ野という町になっています。

❍ 由来

地名の由来は定かではありませんが、考えられるいくつかの説を紹介します。

一つは、三沢川の源流地帯で、幾つもの谷戸から流れ出る水が清らかに澄んでいて、流れの底の黒土の色がそのまま目に入り、人々は「黒川」と呼んだという説です。これは水の清らかさを中心にみています。

もう一つは、谷戸田と称する傾斜のある谷間に階段状の水田が作られ、谷奥の湧水をその田に廻して灌漑をした。その際、万遍なく水を配り、用水の水温を高めるために、田のまわりに高い畦（あぜ）を作った。そのため畦が目立ち、畦のことを畔（くろ）ともいうため、畔の目立つ川ということから呼ばれたという説です。

三つめは、川床の砂が、磁鉄鉱（じてっこう）分を多く含んだ砂鉄が多く、川が黒く見えたからというもので、黒川では中世に製鉄・鍛冶の仕事が行われたからではないかという考えからの説です。

エピソード

黒川の鎮守は、汁守(しるもり)神社です。西隣の東京都町田市真光寺の鎮守は、飯守(いいもり)神社といいます。飯と汁、これには何か理由があるのでしょうか。

汁守神社

土地の言い伝えでは、東京都府中市の六所明神(大国魂神社)の祭礼に、この二つの神社が、それぞれ飯と汁を供進したことから名がついたということです。両方とも食べ物に関係しており、五穀豊穣を祈ったものと思われます。

上　麻　生〔KAMIASAO〕

❍ 場所

小田急小田原線新百合ヶ丘駅の東から、柿生駅の南に至る細長いＬ字状の地域です。北は百合丘、東は下麻生・王禅寺、西は万福寺・古沢・片平、南は東京都町田市に隣接します。

江戸時代には、上麻生村という一つの村でした。現在は、住居表示による上麻生１～７丁目と上麻生という地が残っています。

❍ 由来

中世には、このあたりに麻生郷という大きな村があったようです。江戸時代に、万福寺・上麻生・下麻生・王禅寺の小さな村に分けられ、上麻生村が生まれました。この村名が現在の上麻生のもとになっています。

では「麻生」とはどういう意味でしょうか。

地名としては、「麻という植物が沢山はえている所」ということで、麻の中でも多分「からむし」という麻だと思われます。

今でも、この「からむし」が多摩丘陵の各地でよく見うけられ、この「からむし」から麻糸を紡（つむ）ぎだし、機織機（はたおりき）にかけて麻布をつくるのです。

エピソード

上地の人たちは、今でも「カミアサオ」ではなく「カミアソー」と呼んでいます。

上麻生と下麻生との境の山に「月読神社（つきよみじんじゃ）」があり、両方の麻生の総鎮守です。「月を読む」というのは「暦を読む」ということで、月・日の運行、季節のめぐりを知るということにつながり、「農業の神様」ということになります。

浄慶寺参道の羅漢さん

明治末の神社合祀令(じんじゃごうしれい)により、村内小祠(そんないしょうし)を合祀(ごうし)して、大正５年「麻生神社」と称しましたが、昭和８年にもとに戻して「月読神社」となり、今に至っています。

寺名が村名に

王　禅　寺[OHZENJI]

❍場所

麻生区の東部の広い地域で、西は上麻生、北は百合丘、南は下麻生・早野、東は横浜市青葉区に隣接します。

全体が丘陵地で、中央部に早野川が、西寄りを真福寺川がそれぞれ南北に流れます。

❍由来

地名の由来は、「王禅寺」という古刹（こさつ＝歴史の古い寺）がここにあることによります。江戸時代の地誌にも「その寺名をもって村名とす」と書かれてあります。

現在は、この寺を中心に王禅寺という町が広がり、北に王禅寺東、西に白山、西から北にかけて王禅寺西と表示されています。

エピソード

柿生地区は「禅寺丸」と呼ばれる小型の甘柿の特産地です。

これは南北朝時代に、「王禅寺」の等海上人が、広い山内の奥から発見した甘柿で、苗木を近隣の村へひろめ、土地の特産物にしたと伝えられます。

禅寺丸柿の原木

江戸時代から昭和の戦前まで、この柿はもてはやされました。「王禅寺」の本堂の前にこの柿の「原木」が植わっており、かたわらには北原白秋の詩碑があります。

「柿生（お）ふる　柿生の里　名のみかは
禅寺丸柿　山柿の　赤きを見れば
まつぶさに　秋は爛（た）けたり」

現在「禅寺丸保存会」が立ち上げられ、郷土の誇りを守ろうと努力しています。平成19年に禅寺丸は国の「登録記念物」に認定されています。

ハヤ馬の駆ける野か

早　野【HAYANO】

❍ 場所

麻生区の南東の位置にあり、西は下麻生、北は王禅寺、東と南は横浜市青葉区に隣接しています。

南側を鶴見川が流れ、その支流の早野川と黒須田川が、地域の西と東を南へ流れています。丘陵地に深い谷戸が、何本も刻み込まれています。

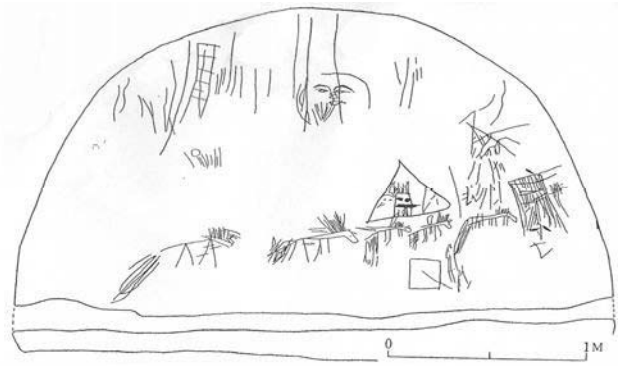
❍ 由来

地名の由来は定かではありません。

言い伝えでは、土地が痩（や）せていて、稗（ひえ）ぐらいしかとれなかったため、「稗野(ひえの)」と呼ばれ、「ヒエノ」が方言で「ヘーノ」となり、それが転じてハヤノとなったといいます。

別の説では、古代の勅旨牧(ちょくしまき＝朝廷の用馬の生産牧場）である「石川の牧」の領域に含まれる地であったため、駿馬（はやうま）の駆けめぐる野ということで、「はやの」と呼ばれたということです。

エピソード



発見された線刻画

聖地公園入り口の、林ヶ池の東側の丘の裾に横穴古墳が発見されました。その奥壁に、線刻画が見出されて話題になりました。

この絵のテーマは「野を疾駆(はやがけ)する馬と、馬にまたがる人間」だそうです。

岡　上【OKAGAMI】

❍ 場所

麻生区の南西にある「飛び地」で、昔は都筑郡岡上村という一つの村でした。片平・上麻生の南にありますが、間に東京都町田市があり、岡上と麻生区とはつながっていません。

小田急小田原線鶴川駅の南側に広がり、北、西、東は東京都町田市に接し、南は横浜市青葉区に隣接しています。北の端を鶴見川が東に向かって流れ、全体は丘陵地です。

❍ 由来

地名の由来は定かではありません。

古くは「岡登り村」と呼ばれていたようです。戦国時代末まで、当地には岡登氏という豪族が住んでいたので、岡登り村になったということです。しかし、そういう人が住む前から地名はついていたと思われます。

地形から考えてみると、鶴見川沿岸低地から見上げる岡の上にこの村はあります。岡の上の村から「岡上村」と呼ばれたと思われます。

「岡上」は江戸時代までは「おかのぼり」と呼ばれており、明治以降は「おかがみ」に変わったようですが、その理由はわかりません。

エピソード

岡上が「飛び地」になったのは、明治 22 年の市制町村制施行の際の、岡上村の判断によります。

当時北の多摩郡では、能ヶ谷・金井などの 8 ヶ村がまとまって鶴川村をつくる動きがありました。南の都筑郡では、奈良や恩田が田奈村をつくろうとしていました。東の都筑郡では、10 村が合併して柿生村を作ろうとしていました。岡上村に対しては、この三つから誘いがあったようです。

岡上村は何処とも合併はせず、独立の村でやっていこうと決断しました。これが「飛び地」になった理由で、このあと柿生村と事務組合を作り、共同で村政を行っていくことになります。